The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ムラーダーバード市の教育機関
Author(s)	プシュペーンドラ, ウメーシュパール ヴァルナワール
Citation	印度民俗研究. 1977, 4, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50303
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ムラーダーバード市の教育機関

プシュペーンドラ・ウメーシュパール・ヴァルナワール

〔概　観〕

現在，約１５平方KMの市街地に２７２，６５２人（１９７１年国勢調査）の人口を擁する過密都市――ムラーダーバード市は，広大なインド亜大陸に広がる北部州（ウッタル・プラデーシュ）の一地方――ムラーダーバード県の中心都市である．また産業貿易都市として発達し，現在３０万人を越える人口は，１９９６年には，５７万人になるものと推定されている．本市は１９７７年　1月２６日より，新設のムラーダーバード管区の管区庁所在地になることになっている．

海外貿易の面では，当市の真鍮製品の輸出は，世界に誇るに足るもので，最新のモデルをはじめ，伝統的な各種の器物や豪華品の鋳造や象眼，彫金あるいはエナメル加工といった技術では，抜群のものと認められている．当市の製品は，種々の唐草模様や多様な形象が，鋭利な彫刻刀によって刻み込まれ，さらに幾種類ものラックが塗り込まれて優美で魅力的なものに仕上げられるのである．また踊り子の足首を鈴の音で飾るグングルー（足首飾り）を始めとして，寺院に涼しい音を響かせる鐘や鈴，それに宴席で使われる酒器から，王侯の館を飾る置物に至るまで，真鍮美術工芸品の魅力は，ムラーダーバードの職人達の営々たる日々の所産であるといえよう．

ムラーダーバードの魅力といえば，黒色線描画があげられる．これは，器物に刻み込まれた画像に黒色のラックを流し込むもので，絵の背景をなす地の部分には，白っぽく輝く磨きのかかった真鍮の素材が選ばれる．これは文様，画像をバックに彫り刻み，そこに黒ラックを塗り込むものであるから，絵像は地の白光色に浮き出て見えるわけである．

これほど盛んな世界的な産業なので，次第に国からの補助や援助を受けるようになってきてはいるものの，こうした技術は当地では伝統的に受け継がれてきたものでしかなく，技術伝授の正規の訓練所とか養成所は，当市には未だもって一つもない．

〔ムラーダーバード市略史〕

現在のムラーダーバード市は，歴史の未だ浅き文明未開の時代には，スム（Sum）とかクシュンガ（Kshunga）とか呼ばれた飲料の原料になったり，紙やひもの原料として用いられたディーカ草（Dīkha）の茂る地方であり，続くアーリヤ人の手になるサンスクリット文献において順を追えば，マディヤ・デーシャ[1]のウッタラガー（Uttaragā）の地であり，パンチャーラ王国（Pañcāla Mahājanapada）[2]のエーカチャクラー（Ekacakrā）[3]やブリグプラ・マイトゥニーヤ（Bhṛgupura－Maithunīya）の地であり，またラージプート時代以降もムガル朝時代のほぼ初期に至るまで，カタハラ（Kaṭhahara）地方の中心都市として繁栄した．その後１６３２年に，この町はラージプート族からムガル皇帝シャージャハーン[4]の手に移り，シャージャハーンの息子ムラード（Murād）[5]王子の名に因んでムラーダーバード（Murād－ābād）と命名され発展したのであった．ムラーダーバードと呼ばれる以前，この町は，ラージプート族の勢力の及んだカタハラ地方のラクノール（Lakhnaur）として歴史上有名な都市でもあった．１５５５年，カタハラのバースシン（Bāsusinh）王は，史上初めて大規模な市場をこの町に開設した．昔，市場があった区域は，現在もバース市場

(Bāsu Mandī とか Bāsu kī Mandī) と呼ばれている．ムラーダーバード市における鋳物業の発展は，カタハラ。ラージプート歴代の王に負うているのである．

古代のカタハラ地方は，現在のルヘールカンド管区 (Ruhelkhand Mahājanapad=Commissionery) と呼ばれる一帯であり，ムラーダーバード市は，当管区のムラーダーバード県 (Janapad) の中心都市である．当市の古代の教育及び文化の変遷を論ずるに当たり，この‘カタハラ’という語を説明しておこう．

Kathahara とは，ヴァイシャムパーヤナ (Vaishampāyana) 聖哲 (リシ) の弟子であり，ヤジュル。ヴェーダのカタ派 (『カタ・ウパニシャッド』[6]) の‘カタ’と名乗る哲人の学統を継承する人，カタ派の釈義者ということで，カタ派から秀逸なヴェーダ釈義者であるバラモンが輩出した地方が正にこの地方であったわけである．

マハーバーラタの戦闘後，ジャラーサンダ (Jarāsandha) の後継者サハデーヴァ (Sahadeva) よりスシュラマナ (Sushramaṇa) に至るまで八十二人の王の系譜が記録されている 五十五代目のワースデーヴァ (Vāsudeva) 王は，古代のムラーダーバード地方の征服者として記されている．広大なカタハラの地には，ジャイナ教文化とともに仏教文化も開花したが，ムラーダーバードの市街部は，仏教文化の一中心として栄えたことがあり，今日に至るもそれは，ナート派，[7]左道派[8]及び寺院の形でその名残を留めている．西暦５４６年頃，スシュラマナ王がムラーダーバードを支配していたが，その頃現われた八十四人のシッダ (Siddha)[9] の 代表的な存在であったカーニパー。シッダ別名カーンハパーダ (Kānipā, KānhaPāda) の一門は，今も当地の Kānipā kī ghaṭiyā という地名に名をととめている．プリットヴィーラージ (Pṛthvīrāj)[10] の時代に現われたジャードン (Jādon) という王は，この地方出身であった．１３５０年には，カダグシン (Khaḍagsinh) が，１４２４年には，ハルシン (Harsinh) 王が，１５００年には，ジャガットシン (Jagatsinh) が，この地方の支配者となった．１６２４年から１６３２年まで続いたラージプートとムガルとの戦いで，前者が敗れ，その結果，ラクノール (Lakhnaur) と 呼ばれたラージプートの城砦とその一帯が，ムガル皇帝アクバルの皇子ムラードの名に因んでムラーダーバードと称され，それ以来ずっとこの町は，ムラーダーバードと呼ばれてきている．

〔ムラーダーバードの古代の教育状況〕

ムラーダーバード市は，古くはドローナ (Drauṇa)[11]の如きアーチャーリヤ，パラシュラーマ (Parashurāma)[12] の如き家門の師，ブリグ (Bhṛigu)[13] の如き哲人，ドゥルパダ (Drupada)[14] の如き王が活躍した地に位置している．また市街地の古称はブリグプラ。マイトゥニーヤであることからしておそらくこの地方では，時代の要請に応じて教育文化にも発展が見られたことであろう．それに‘カタハラ’の語源については先に触れたが，ムラーダーバードの旧き呼称として使われてきた‘カタハラ’という言葉こそ，この地の人が，ヴェーダの学習者であったことを物語っている．ムラーダーバードには現在もなお，ヤジュル。ヴェーダのカタ派に属する優秀なバラモンが住んでいる．

時代の変遷に伴い，仏教もその影響を受け変わっていった．仏教の変遷については周知の通りである．カーニパーについては先に触れたし，ナート派についても言及した．ナート派について付言するならば，ムラーダーバード市には今日なお，この派の伝統を受け継ぐヨーギーが多数旧習を保持している．チョウラーシー。ガンター (八十四個の鐘) 寺院とか，カーニパーのガティヤーといったものは，そうしたものの学統の名残なのである．

ナート派の後，この地方では，タントラ教左道派が勢を得た．左道派の中でもアゴール派[15] のブラーフマンは五Ｍの行法〔マツヤ (Natsya魚)，マディヤ (Madya 酒)，マーンサ (Maṁsa 肉)，

ムドラー（Mudrā 印契），マイトゥナ（Maithuna 交接）〕に没頭し，修道法や秘儀をヨーガの名のもとに受け継いできたのであった．現在もこの派に属する人たちは，ムラーダーバードにかなりの数見出される．しかし卑猥にして，かつ野卑な秘儀と悟った一派の人たちは，これまでの行法を自ら放棄し，一般市民として魚屋を生業に市民生活をおくっている．

ヴァーツヤーヤナ（Vātsyāyana）の『カーマ・スートラ』第一部第三章十七節によると六十四芸（性愛の技巧）もインドのこのパンチャーラ地方で完成したものであった．（Pāñcālikī ca catuḥsaṣṭhir aparā）古代における外科療法による性転換の例は，シカンディー(Shikhaṇḍī)[16]に見られる．カーマ・スートラによると，この地方では性愛学がかなりの発達をみたようである．インド各地に送り込まれたヴィシュカンヤー（Viṣkanyā）[17]やピンガラー（Piṅgalā）[18]の娘達は，実にこの地方で養育され，訓練を受けたのである．昔，遊廓や若者宿のあった場所はその名とともに今も市内に残っている．ラージャシェーカラ[19]によると，この地方で演劇術や舞台技術も培かわれてきたということである．またこの地方の魅力は，何といってもこの地独特の結髪術にあり，市内に残るシュンガ王朝[20]期の影像からうかがい知れる．

〔中世の教育状況〕

インドは１０世紀以降，政治的に混迷した時代が続いた．シッダ派，ナート派の時代から次の時代に入って，外部からの侵略，異教の伝道，流布により当時の市街地やその周辺一帯では，宗教間の論難が続いたり，転宗を逃れようとの努力がなされたりしていた．教育というほどの正規の学問，研究に関する記述や言及は全く見当らない．もちろんこの時期にカビール派[21]とかウダーシーン派[22]が，この地で活躍したことは確かである．カビール派は左道派に相対して生まれたものであるが，現在も存続している．ウダーシーン派は２年程前にそのマハント（僧院及び学院の長）であられたアーチャーリヤ・ミシュリーラール氏の急逝により大きな打撃を被り，アーユルヴェーダ（インド医術）による無料旋療の慈善事業もこの僧院からもはや姿を消してしまい，学院の運営にも混乱をきたしている．現在，アーチャーリヤの唯一人の孫が祖父を継いで僧院長の座にあるが，まだ若輩の身で目下祖母の庇護の下で勉学に励んでいる．

一説によると，左道派の行法がはびこっていたこの町は，シャージャハーン時代にペルシア語教育がイスラム教伝道師の活動の影響で盛んになり，オーラングジェーブ帝[23]の時代に至ってマドラサー（Madrasah，宗教学校）となったという．だが，この宗教機関の存在を証するものや遺跡を，筆者はまだなに一つ確認するには至っていない．

〔イギリス統治時代のムラーダーバード市の教育〕

１８０２年，東インド会社は，アワド（Awadh）[24]のナワーブ（太守）から，ムラーダーバードの町も奪い，その支配下においた．東インド会社により，この地に初めて砲台が構築された．砲術訓練はカルカッタで行われていた．その後２０年代に入って，会社当局により，市内に小学校が三校開設された．その内の二校は，いわゆるセポイの反乱，すなわち１８５７年の独立戦争勃発に伴い，閉鎖のやむなきに至ったが，あとの一校はその後も存続し，これが現在我々が知るところのタフシーリースクール（Tahsīlī School），すなわち郡立校，もしくは官立モデル校と呼ばれているものである．男子校だったこの学校は，１９７６年度から完全に女子校に変わっている．

１８５７年のセポイの反乱後，イギリス当局により，この町の教育行政にも関心が示され，工業高校の設立をみるに至った．この学校は，イギリス統治時代初期の１８５８年に英政府の支配下におかれていた北インドの各地方に一斉に設立された五つの学校の内の一つであったということである．しかしこの技術訓練学校もその後１９２６年には，シュリー・サーンワルダース・サダンラール・カトリー・トラスト（Sāwaldās Sadanlāl Khatrī Trust）に引き渡されることになったが，

ここでは現在も電気技術やその他種々の専門技術が修得できる．

セポイの反乱後，他にもう一校，プリンス・オヴ・ウェールズ鉄道学校（Prince of Wales Railway School）という私立学校が，鉄道職員によって開校されていた．当学校の設立年月日は不詳であるが，登記関係の書類が見つかっており，それによると１８６９年には順調に運営されていたようである．当校の管理及び運営には当時連合州の学務局（Department of public Instruction）があたっていた．

ムラーダーバード市内には，連合州の学務局の管轄下に官立の小学校も二校あった．アーダルシュ・タフシーリー・スクール（郡立モデル校）とガヴァメント・スクール（Government School）とがそれである．１８５７年の反乱でガヴァメント・スクールの機能は一時中断したが，１８６１年になって再開された．爾来，今日までこの学校はムラーダーバードの城砦の廃虚に建てられた校舎で授業を行なっており，インター・カレッジとなってからも，はや百年以上になる．タフシーリー・スクールは，現在もラージキーヤ・アーダルシュ・スクール（官立モデル校）として八年級までの児童に機織り，刺しゅう，編物，製本術，木材工芸等の技術指導，教育がなされている．１９７６年から，男子校から女子校になっている．

１８６３年，アメリカのキリスト教奉仕団がアメリカ方式初等学校を初めてムラーダーバードの地に開設した．現在もターイタス小学校（Titus Elementary School）と呼ばれて存続している．同奉仕団の企画運営委員会の管轄下に，後年パーカー・スクール（Parker School）とメソジスト女学校（Methodist Girls School）の二校が開校された．メソジスト女学校では１９０８年以来教師養成もなされてきたが，今年で廃止された．この二校はともに現在インター・カレッジ（Inter College）になっている．

１８７９年に，イスラーム教徒の子弟の学校として，市内のシャーヒー・マスジッド（Shāhī Masjid）内にシャーヒー・マドラサー（Shāhī Madrasah）が開校され，無料でアラビア語教育が授けられている．この学校は，デーオバンド（Deoband）のデーオバンド・マドラサー（Deoband Madrasa）[25]の姉妹校となっている．

また１８８１年にサー・サイヤド・アフマドカーン（Sir Saiyad Ahmad Khān）[26]の勧めにより，市内にアラビア語及びペルシア語の教育を目的とした学校 Madrasah 'Arbiyā Imdādiyā が設立された．この学校では，教育媒介語はアラビア語及びペルシア語に限られている．

伝統的なサンスクリット教育を施す初等教育機関が発展の機を得た．１８８２年に，バルデウォ・サンスクリット学校（Baldev Sanskrit Vidyālaya）の設立をみる．現在，当校ではシャーストリー（Shāstrī）までの課程が設けられている．

教育界の覚醒とともに当初，認可を得られなかった伝統的なサンスクリット教育の学校も後になって政府認可を受けるに至っている．１８９９年，ジャワーハル・サンスクリット学校（Jawāhar Sanskrit Vidyālaya）も同じくサンスクリット教育専門の学校として認可を受けた．サンスクリットの碩学パンディット・バワーニーダッタ・ジョーシー（Bhawānīdatta Joshī）は同校のアーチャーリヤ（教授）であった．この天才の力を得て，聖哲ダヤーナンドは『サティヤールト・プラカーシュ』（Satyārth Prakāsh）を，１８７４年ムラーダーバードで首尾よくヒンディー語で書き著わしたのであった．同書の直筆本は，現在も当市の正統派ヒンドゥーの名門である故ラージャー・ジャヤキシャンダース・チャトゥルヴェーディー（Rājā Jayakishandās Caturvedī）氏の邸宅に，遺族の人達により保管されている．この時期にもう一校パルシャディーラール・ラストギー・サンスクリット学校（Parshādīlāl Rastogī Sanskrit Pāṭhshālā）がサンスクリット学校として認可を受けた．しかし，優秀なサンスクリット学校であったこの二校は１５年来閉校されたまま

である．

ムラーダーバード市内にアグラワール・ヴァイシュヤ（Agrawāl Vaishya）[29]に属する金融業の一家がある．同家の先祖は，ナーディル・シャー[30]の圧迫を受けて，デリー市郊外の村落から命からがら逃げて来たのである．ムラーダーバードに移り住んでからも，家業の金貸し業を営んだ．この商売では，番頭と警備員がどうしてもいる．そのためムガル朝の末期つまり東インド会社がこの地方を掌握した頃に，同家の経営の下に学校が設けられ，ムンディー文字[31]及び符牒が教えられた．同校は１９０２年，アグラワール学校（Agrawāl Pāṭhshālā）と名を変え政府認可を受けた．しかし現在，この教育は，一家の家業に関連したものとしてのみ伝えられてきている．数十年前までは，この一家の業務は，広大なインドの殆んどの聖地に派遣した番頭と警備員によって行われていた．またインドで紙幣が使用されていなかった当時，同家の番頭からフンディー（Huṇḍī，一種の旅行者用小切手）を受け取って出かければ，巡礼者はインド全国どこへ行くにも大変便利であった．しかし，１９４７年にこの制度は廃止された．

英領インドのイラーハーバードの地に，１８９３年下級官吏や警察職員養成を目的とした養成所が開設された．１９０９年同校はムラーダーバード市に移転，１９３５年にはカレッジに昇格，現在，警察庁職員や警部補ならびに下級の警察官の養成訓練に当たっている．１９６２年には，法令調査資料部も設置されるに至った．

１９０４年，ムラーダーバードにムスリム学校が開校，１９１２年に中学校になり，さらに１９１６年には，ハイヴィト・ムスリム・ハイスクール（Haivit Muslim High School）と名を変え現在インター・カレッジとして存続している．

１９０９年，市内にイスラーム教教育の振興を目ざした高等教育機関及び研究所として，ジャミヤー・ナイーミヤー（Jamiyā Naimiyā）が設立された．私立学校ではあるが，一流の教師を擁した大学レベル並の高度の教育を授けている．

１９１１年，市内在住の金融業者の組合が，ヒンドゥー中等学校（Hindū Middle School）を設立した．同校は１９１６年には高等学校，さらに１９３７年にはインター・カレッジと姿をかえ正規の学校として現在も続いている．

１９３４年，女子教育を主眼としたインター・カレッジが開校された．ゴークルダース女子カレッジ（Gokuldās Girls College）がそれである．この学校は，理科及び教育学の講座が充実している．

１９１７年には，宗教普及を目ざして，サイディヤー学校（Madrasa Saidiyā）も開校された．

今世紀３０年代にはムラーダーバードにアーリヤ・サマージ[32]の勢力台頭に伴い，アーリヤ・サマージの理念に基づく，略称Ｎ．Ａ．Ｖ．すなわちナショナル・アングロ・ヴェーディック・スクール（National Anglo Vedic School）[33]と呼ばれる学校が設立された．高等学校までの生徒を対象にした教科が教えられているが，現在は，Ｈ．Ｓ．Ｂ．大学予科（インターミティエート・カレッジ）になっている．

１９４４年，ムラーダーバードの商人シュリー・ラグナンダン氏は，ラグナンダン・ナショナルスクール（Raghunandan National School）を開校した．製本，裁縫，農業関係の教育を施したが，１９４７年には中等部，高等部をもつハイスクールとして認可を受けた．現在も当市の一流のインター・カレッジとして存在している．

古式のアーリヤ・サマージの影響下に，ヴェーダの教育の伝統につらなるグルクル[34]方式の学校――リシクル・サンスクリット学校（Ṛṣikul Sanskrit Vidyālaya）が，１９２４年市内に開校された．現在もアーチャーリヤ（サンスクリットの修士号）の課程まで学べるサンスクリットの

最高学府である．

実業学校として１９２６年にＳ．Ｓ．Ｋ．商工学校（S. S. K. Commercial and Industrial College）が設立され，後に高等学校として認可された．現在インター・カレッジになっている．同校では冶金術，商業，皮革工芸，裁縫，編物，製本術のほかに十一年級までの理科や工芸が教えられている．電気技師のコースもある．

その他の学校――１８５０年に町村の小学校を再編成し，アーダルシュ・スクールとかヒンドゥスターニー・スクールとか呼ぶ初等教育レベルの初等学校が設立されたが，その後それらは，県の初等教育部の管轄下に置かれた．一方，都市部の学校は市の保健・教育課の管轄下にあった．１９１３－１４年度には，下級小学校が設けられ，図画，村の地理，自然観察，体育の教科が必須科目として教えられた．上級小学校も数校開校され，そのいくつかは，１９２３年に県の初等教育部の管轄下に移された．また，ムラーダーバード市の官立女学校（中等級）と市立の上級小学校が，Anglo Middle School として認可された．

１９４７年８月１５日，インドは独立を獲得した．当時，上記の学校や高等学校の外に市自治体（Municipal Board, Murādābād）におかれていた小学校は三十九校，中学校は二校存在した．パトワーリー（Paṭwārī）[35]養成専門の学校もあった．

〔独立後の教育状況〕

１９４７年８月１５日，インドは独立国家となった．独立の女神の降臨に伴い，国はあらゆる分野で幾多の改革を試みた．ムラーダーバード県は，北部州西部の重要な地域であり，そのムラーダーバード県の中心都市であるムラーダーバード市は，教育文化の面でもその他の面でも大いに発展を遂げた．学士号や修士号が取得できる大学が，五校も設立された．工業技術専門のカレッジ（Politechnic College）一校，工科大学Ｉ．Ｔ．Ｉ．（Industrial and Technical Institute）一校，医科カレッジ（Medical College）一校，また数多くのサンスクリット学校，市自治体運営の小学校，イスラーム学校等の開設をみた．１９７３年１２月３１日現在のムラーダーバード市の教育状況は，次の通りである．なお就学者の年齢，生徒数及び教育機関等の解説に当たり，教育状況調査報告書の表を参照した．

第三次インド全国統一教育普及状況調査報告書

（都市部一覧第二表）

１９７３年１２月３１日現在の状況

（１）州名　－　ウッタル・プラデーシュ（北部州）

（２）県名　－　ムラーダーバード

（３）開発ブロック名　－　ムラーダーバード

（４）市名　－　ムラーダーバード

（５）市の規模（人口による区分）　－　人口１０万人以上の都市

（６）市の総人口（１９７１年国勢調査に基づく）

(a) (1) 男　148,173

(2) 女　124,479

(3) 計　272,652

(b) 指定カースト及び指定部族人口

種　類	男　性	女　性	合　計
指定カースト	7,930	6,104	14,034
指定部族	351	283	634

(c) 市における就学年齢層別人口（推定）

年齢区分（歳）	男	女	合　計
2 ― 5	17,508	15,365	32,873
6 ― 10	20,165	17,334	37,499
11 ― 13	11,255	9,586	20,841
14 ― 16	10,317	8,404	18,721
17 ― 18	3,282	2,757	6,039

（7）職業別人口　（1971年国勢調査に基づく）

(a) 労働者数

	男	女	計
(1) 農　業	4,345	168	4,513
(2) 農業以外の職業	66,372	1,664	68,036

(b) 非労働者数

男	女	計
77,456	122,647	200,103

（8）市内に所在する認定校数

学　校　名	学校数 男子校	女子校	共学校	合　計
幼稚園（保育園を含む）	―	―	3	3
初等学校	22	10	54	86
初等中等学校	5	11	11	27
中等学校	5	1	―	6
高等中等学校	―	―	1	1
予科大学	13	11	―	24
教員養成所	3	5	―	8

その他の学校

(1) サンスクリット学校	4
(2) アラビア語学校	5
(3) 養護学校	0
(4) マクタブ（アラビア語・ペルシア語学校）	3

（９） 就学年齢層別人口比率（推定）

年齢層	２－５		６－１０		１１－１３		１４－１６		１７－１８	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
%	11.2	11.7	12.9	13.2	7.2	7.3	6.6	6.4	2.1	2.1
人口	17,508	15,365	20,165	17,334	11,255	4,586	10,317	8,604	3,282	2,757

（註　上記の資料はムラーダーバード市教育課の提供に基づく）

北部州は教育部門だけを見ても，インド全国の約 16.5％ の児童。生徒の教育を預かっておりムラーダーバード市は　同州の新興都市であると同時に教育文化の中心地でもあるわけで，同市の義務教育年限を含む就学年齢児童生徒数は，115,973 人に上っている．しかしこの学童生徒数に対して学校は大小合わせてわずか 155 校しかない．また教育費の割合，予算に関しては，１９５０－５１年度には．児童，生徒１人当たり年に 1.15 ルピーの出費であったのが，１９７３－７４年度には，9.08 ルピーに伸びている．また３度にわたる第一次五ケ年計画実施に伴い計上された教育予算のうち６０％が初等教育に，１５％が中等教育に，そして４％が大学教育に振り分けられ，残り１０％は教員養成や学生軍事教練隊（National Cadet Corps－略称 N．C．C．）等に割り当てられた．第四次五ケ年計画での教育費の内訳は．６７％が初等教育費，１７％が中等教育費,１０％が大学教育費にあてがわれ，残り１０％が種々の目的に活用された．

第五次五ケ年計画の初年度には，初等教育に５４％，中等教育に２４％，高等教育に６％，大学予科に３％，その他の教育活動に２％の予算が見積もられている．また　日進月歩の教育界の状況を把握し適確に対応し質的向上を図るべく，州には高等教育，中等教育，初等教育の各部門担当の監督官が１名ずつ第四次五ケ年計画で任命されている．

＜初等教育＞

北部州における初等学校（６～１１歳）就学児童数は，１９４６－４７年度　２，００８，０００人であったのが１９６０－６１年度には４，０９３，０００人になり，１０年後の１９７０－７１年度に至っては，　１０，８６５，０００人と大幅に増加している．ムラーダーバード市の生徒数３７，４９９人もこの中に含まれているわけである．

北部州の初等中等学校（Senior Basic School中学校）は，１９４５－４６年度には 1，676 校だったのが，１９６０－６１年度には 4，335 校に増え，１９７０－７１年度には一時８，７８７校にも上った．初等中等学校では，１１－１４歳の生徒が学んでおり，ムラーダーバード市のその数は２０，８４１人にのぼる．

北部州では，当初初等教育機関は，全部各都市の自治体の管轄下にあったが，１９７２年に初等教育条令が制定され，学校の管理は以後，新設の初等教育会議に全面的に委ねられることになった．現在，初等教育の運営には県の初等教育局の局長，視学官などが当たっている．また，社会建設作業活動の一環として最も身近な規模で麻織りの敷物（教場の床敷き），黒板，机づくり，あるいは教場建築技術等の指導が行われている．

＜中等教育＞

独立当初つまり１９４７－４８年度には，ムラーダーバード市における中等学校は全部で１０校だけであったのが，第五次五ケ年計画に至るまでに３０校以上になっている．教育水準の向上を計るために高等学校及び大学予科教育委員会によりカリキュラム，調査，研究の特別委員会が１９７６年に設置された．またこれより先，１９７３－７４年度に当市の中等教育機関全校に理科が教

科課程に組み込まれるようになった．１９７１－７２年度以降，国の援助を受けている私立の高等中等学校の教員の給与及び諸手当の支給の管理責任も市の教育課が負うことになった．

＜高等教育＞

独立後，高等教育もめざましく普及したが，さらにその定着化をはかるために，高等教育部門を担当する監督官のポストが新しく設置された．またそれと共に高等教育の円滑な運営をはかるべく高等教育監督局が設立された．また，全国的な規模での高等教育の人事管理計画が実施されつつある．ムラーダーバードにはカレッジが５校あるが，そのうちK. G. K. Post－graduate College（１９４８年設立）とHindu Post－graduate College（１９４９年設立）の２校が市内にある男女共学の代表的な大学である．一方女子教育を目標に設立されたSahu Gokuldas Girls Degree College(１９５２年設立)には１９６４年に研究科も設置された．同校には教職課程も置かれているし，理学科（物理学及び生物学）でも比較的高いレベルの講義がなされている．

女子教育機関として，もう１校１９６０年に，Dayanand Baldev Arya Kanya Degree College が認可を受けた．同カレッジも教育学科をもつ．

上記の４つの高等教育機関の他にもう１校，１９６７－６８年度にParshadilal Rastogi College がMaharaja Harishcandra Degree College と名を変えて認可を受けた．ムラーダーバード市の上記の計５校は，以前はアーグラー大学（アーグラー市所在）の管轄下にあったが，ルヘールカンド大学（Bareli 市所在）の設立をみるに至って，１９７５－７６年度より全面的に同大学の管轄下に置かれることになった．

＜独立後の予科校及び高等学校＞

独立以後の中等教育の発展に関しては既に述べたが，高等学校及び大学予科は，１９４６年(独立の前年）には１０校余りしかなかったのが，現在では４０校にも上っている．独立後発展を遂げた主な高等学校及び大学予科は次のとおりである．

１．バルデウォ・アーリヤ女子インターカレッジ（Baldev Arya Kanya Inter College）１９１９５２年設立　２．J. R. アグラワール女子インター・カレッジ（J. R. Agrawal Kanya Inter College）　３．アーリヤ・サマージ女子インター・カレッジ（Arya Samaj Kanya Inter College）４．アブドゥルサラーム女子インター・カレッジ（Abdul Salam Kanya Inter College）　５．プールワティー・デヴィー女子インター・カレッジ（Phulwati Devi Kanya Inter College）６．P. D. A. ラージカラー女子インター・カレッジ（P. D. A. Rajkala Kanya Inter College）７．カーヤスト学園インター・カレッジ（Kayasth Pathshala Inter College）８．プラマーデヴィー女子中等高等学校（Pramadevi Kanya Higher Secondary School）９．パルシーディーラール・ラストギー・インター・カレッジ（Parshadilal Rastogi Inter College）１０．ヴァイシュヤ学園インター・カレッジ（Vaishya Pathshala Inter College）１１．ラーム・バローセーラール中等高等学校（高等学校）（Ram Bharose Lal Higher Secondary School）　１２．アグラワール・インター・カレッジ（Agrawal Inter College）１３．ファラー・エ・ダーレン中等高等学校（Falāh－e－Daren Higher Secondary School）等々．

＜１９４７年以降設立されたサンスクリット学校＞

１．シュリー・バイジナート・サンスクリット大学（Shri Baijnath Sanskrit Mahavidyalaya)(１９５３年設立)（一流の研究科課程あり）　２．シュリー・ブラーフマン・サンスクリット学校(Shri Brahman sanskrit Pathshala)等々．

＜司書養成機関＞

ムラーダーバード市における司書養成の正規の講座は北部州図書館学協会（Library Science

Association ）のムラーダーバード支部の運営の下に１９６４年以来開講されている．

＜独立後のウルドゥー語学校＞

1．マドラサー・ハブズル・クラーン（ Madrasa Habbzul Qurān ）　2．ハヤートゥール・ウルーム（ Hayātul Ulūm ）　3．ザミール・フダー（ Jāmia'ul Hudā ）等．

＜その他＞

独立後ムラーダーバード市では，成人教育にも関心が示され，市当局により当初夜間学校が18校開校されたものの，途中で管理上のまずさから閉鎖のやむなきに至った．しかし３，４年後には，４校が再び開校され現在に至っている．

＜教員養成＞

メソジスト女学校（ Methodist Girls School ）は，１９０８年以来ずっと教員養成を行なってきたが，１９７６年に都合で廃止された．また，インド独立期の主要大学の一つであり，Normal School（師範学校）の名で発展した教員養成機関は，現在官立教員養成所（ Rajakiya Diksha Vidyalaya ）と名を変えムラーダーバード市に残っている．当校では教員資格（ B. T. C. ）が授与される．K. G. K. 教員養成所はB. T. C. 養成を行っていたが，１９７６年廃校になった．

教員養成の道を絶たれた学生を対象に，上記の機関に代わるものとして，ムラーダーバード市周辺の開発地帯に養成所が数校設立された．

＜教育学科をもつカレッジ（教員養成機関）＞

市内にある三つのカレッジが教職課程をもっており多数の学生に教師になる道が開かれている．当初男女共学制を敷いていたヒンドゥー・カレッジは，男子学生のみの養成機関になっている．ゴークルダース女子カレッジでは，１９６４年に女子学生のみを対象にした教職課程が設置されて現在に至っている．またダヤーナンド女子カレッジには１９６１年に教職課程が開設された．

＜教員の待遇と年金制度＞

恩給に関するいわゆる三特典制度に基づき，１９６４年１０月１日より，国庫補助を受けている教育機関，学校を退職した教職員に対し，年金制度が与えられている．

１９７３年２月より小，中学校の教員全員に対して，生命保険制度が実施されるに至っている．１９７３－７４年度からはこの制度は中等高等学校の教員に対しても適用されることになった．また１９７３年１１月１日より，補助金の交付を受けている中等学校の教職員も．公務員と同額の俸給及び諸手当ての支給を受けることになった．中等学校の教員には昇進に関して優遇されている．

＜技術教育＞

独立以前，国立の主要大学を除くと北部州には，工科カレッジ（ Engineering College ）がルルキー（ Rurkī ）に１校存在しただけであったが，１９６３年になって第三次五ケ年計画のもとにムラーダーバード市内にも Polytechnic Institute とよばれる工科カレッジ（ Engineering College ）が１校，Industrial Training Institute とよばれる実業学校が１校開校された．当市にあるS. S. K. 商工学校（ S. S. K. Commercial and Industrial College ）では独立以前から電気技師を養成している．

＜学生寮＞

特に充実した学生寮として，ゴークルダース女子カレッジ付設のゴークルダース・グジャラーティー女子寮及びヒンドゥーカレッジ付設のヒンドゥー教育協会寮（ Hindu Educational Society Chatravas ）が挙げられる．また，ダヤーナンド・カレッジ官立教員養成所，Government College 及びK. G. K. カレッジもそれぞれ完備した寮施設を備えている．

＜補　遺＞

(1) サンスクリット

サンスクリット学校では英語が入試科目及び必修科目からはずされた.

(2) 医 学

ムラーダーバードでは第三次五ケ年計画のもとに, ディプローマ課程 (Diploma Course) をもつ K. G. K. 医科大学が設立された.

(3) 法 学

K. G. K. 大学 (K. G. K. Post Graduate College) は法律学科の講座も充実している. 当校の法科は北部州西部では, 最高の学生数を誇っている.

(4) その他の技術教育

官立中等学校は新しい試みとしてインターの課程に専門技術の科目を組み入れ, 新しく別個の課程を設け, 1960－61年度より実施している.

(5) 検察庁

警察学校 (1935年設立) に続いて, 1949－50年度に検察官学校 (Court Room) が開校され, 検察官の研修, 養成が行われている. また1961年度には, 警察学校付属資料館も開館されることになった.

(6) 警察法令調査資料部 (Police Training Publication Station)

これは1962年に監察次官の管轄下の警察官養成所に付置された.

(7) 文化講座 (各種学校)

市内に音楽学校は3校あり, カッタク・ダンス[36] やタブラー (鼓) 奏法及び声学等の正規の専門教育指導が行われている.

以上見てきたようにインドのような広大な国土のこれまた広大な北部州の軽工業都市ムラーダーバード市は北緯28°2′～29°16′, 東径78°4′～79°にひろがるムラーダーバード県の県庁所在地であって, しかも首都ニューデリーより東方約160 KMの距離にあり北部鉄道地方管理局所在地でもある. 各分野での巾広い教育活動及びその発展振りにもかかわらず, この町の伝統産業である鋳物業に対する国の関心は薄く, 近代的設備を備えた官立の技術養成所は1校もない. しかし, その他の面での教育は順当な進展を見せている. 目下, 医学部門では, 外科医術の教育の充実が叫ばれている. 家族計画推進のための指導員養成訓練はたいていムラーダーバードで行われている. 未来に希望を託し, 現在に自信をもって進むムラーダーバード市の教育の未来は明るいといえよう.

ヴィクラマ暦2033年カールティク月白半2日 (1976年10月24日) 記す

Pushpendra Umeshpal Varnwal (ムラーダーバード市立図書館司書)

〔註〕

1. Madhyadesha (中原の意味) 『アーイタレーヤ・ブラーフマナ』にみえるジャムナ川とガンジス川にはさまれた地域.

2. Pāncāla デリーの北西に広がる地方. またそこに居住した部族及び彼らの築いた紀元前7, 8世紀頃の王国. Hariyaswa 王の5人 (パンチャ) の王子の意味. 後にここを流れるガンジス川をはさんで北パンチャーラと南パンチャーラに分かれる. 前者は現在のルヘールカンド地方, 後者はドアーブ流域にあたる. 『マハーバーラタ』や『ブラーフマナ』にみられる歴史の舞台である.

3. Ekacakrā 『マハーバーラタ』に描かれている地名. パンドゥ王の5王子 (パーンダヴァ) は12年間の流浪生活を Kīcaka 国のエカチャクラーで過ごす.

4. Shāhjahān　ムガル帝国第5代皇帝（在位　1628－1657）

5. Murād　シャージャハーンの第4王子

6. Kaṭha Upaniṣad　古ウパニシャッドの中の韻文で書かれた中期（B. C. 400～B. C. 200年頃）の名篇．一神教，サーンキヤ，ヨーガなどの哲学的思想を述べたバラモン教の根本聖典．

7. Nāth派　北インドで勢力のあったタントラ教に基づくヒンドゥー教の宗派．シャクティ崇拝，ヨーガの実修，秘教的な礼拝儀式を行う．

8. 左道派（Vāmamārga）　タントラ教のシャクティ派（性力崇拝）は左道派と右道派に分かれる．左道派はシヴァの神妃デーヴィーの残忍かつ凄惨な姿をあらわしているカーリー女神やドゥルガーを崇拝し，酒肉を食し，家畜供儀をする一派である．

9. Siddha　ヒンドゥー教のナート派や末期仏教の苦行僧で修行を完成した者をこう呼んだ．

10. Pṛthvīrāj　12世紀末から13世紀初頭にかけてデリー地方を支配したヒンドゥーの王．

11. Drauṇa　『マハーバーラタ』に登場するパーンダヴァ5王子及びその従兄弟カウラヴァ王子達の武術の師（アーチャーリヤ）．

12. Parashurāma　（「おのを持ったラーマ」の意味）『マハーバーラタ』に登場するパーンダヴァ5王子の中の次兄アルジュナの武術の師であったが後に大戦争ではカウラヴァ側の参謀役を務めた．

13. Bhṛgu　パラシュラーマを世に出したブリグー族の始祖とされる．ヴェーダの聖哲．

14. Drupada　上記のパンチャーラ王国の王．パーンダヴァ5王子の共通の妻であるドローパディーを娘にもつ．

15. Aghor（Aghor panth）　ヒンドゥー教シヴァ派の中の極端な一派．

16. Shikhaṇḍī（男性名），Shikhaṇḍinī（女性名）　パンチャーラ王国の王ドゥルパダの娘（シカンディニー）として生まれたが後にクル平原の大決戦では勇士（シカンディー）として描かれている．

17. Viṣkanyā　（「毒娘」の意）美女を幼少の頃から毒物，毒草で育てあげ，一人前の娘に成長した時敵地に送り込み，交会した男性をその毒の力で殺すとされる伝説的存在．毒娘はインド古典劇『ムドラー・ラークシャス』や11世紀の説話集『カター・サリット・サーガラ』等に登場するように，インドの文学作品では比較的ポピュラーなモチーフである．

18. Piṅgalā　現在のムラーダーバード県サンバル郡（Sambhal）の同名の中心地サンバルを古くPiṅgalaと呼んでいた．この地で音楽舞踊の訓練を受けそれを職業として宮中に仕えた女性．詩歌をはじめ文武にすぐれ密偵としても働いた．その女性をピンガラー（Piṅgalā）と呼んだ．

19. Rājashekhara　10世紀頃のサンスクリット劇作家．

20. Shuṅga王朝　マウリア王朝崩壊後，紀元前2世紀から約1世紀余り北インドに盛えた王朝．前王朝アショーカ王の仏教擁護政策の影響に伴い，この時代にも仏教彫刻が数多くつくられた．

21. Kabīr派　聖詩人カビール（1440－1518）の教えを受け継ぐ一派．カビールはヒンドゥーの改革派ラーマナンダの12人の弟子の1人．インド教ならびにムスリム教の聖典や慣習を排斥し，ヒンドゥー教のラーマやゴヴィンド，それにイスラム教のアッラーとかラヒームとかいう神は，呼び方を異にしているだけですべて同一の神であるとし，偶像を排した一神教に基づく独自の教えを平易な言葉で民衆に説き，ヒンドゥー・ムスリム両教徒に影響を及ぼした．

22. Udāsīn派　シク教の教祖グル・ナーナクは2人の息子を斥け，弟子のアンガドを2代目グルに任命したため，息子の1人シュリーチャンドは別にウダーシーン派を組織した．現在も主流派

のカールサ党やアカーリ党に対し，反主流派として寺院（グルドゥワーラー）での教育・慈善事業に活動を続けている．

23. Aurangzeb　ムガル帝国第6代皇帝（在位1658－1707）

24. Awadh　18世紀の中頃ムガル帝国の統一支配崩壊後，現在の北部州ラクノウ市を含む地域に成立した小国．その支配者はナワーブ（太守）と呼ばれた．1802年，イギリスはルヘールカンドやアワドの南半分（下ドアーブ）の国土を併合してしまった．後にいわゆる「セポイの反乱」を起こしたベンガル軍のセポイの3分の1は，このアワド出身者であった．

25. Deoband Madrasa　正確にはDārul'ulūm Deoband．1867年にムハンマド・カーシム及びラシード・アフマドによりイスラム教伝統主義神学復興のためデリーの北方約120 KMに位置するDeobandに開設された神学校で，今日イスラム圏の代表的な神学校の1つに数えられている．

26. Sir Sayyid Ahmad Khān　（1817－1897）19世紀後半に活躍したインド・ムスリムの社会改革者，歴史家，思想家，教育家．アリーガル運動の指導者．デリー出身．東インド会社に長く勤務したが，セポイの反乱以後植民地化されたインドを憂い，特にインドにおけるムスリム社会の向上，発展に大きく貢献，生涯を捧げた．

27. Dayānand Sarasvatī　（1824－83）アーリア・サマージの創始者．サンスクリット学者．宗教・社会活動家．グジャラートのバラモンの家に生まれ，22才で苦行者となり，師について『ヴェーダ』の学習及び修行に励む．各地を遊説，44才で宗教活動，社会活動の道に入り1875年にアーリア・サマージを設立する．

28. Satyārth Prakāsh　『真理の意味の啓示』（1874年）アーリア・サマージの理念が盛られた啓蒙書．『ヴェーダ』の注釈書も数多くあるが，ダヤーナンドの著作の中でも最も著名な作品．イスラム教・キリスト教等の他宗教を排撃し，ヒンドゥー教優位や「ヴェーダに帰れ」を説く．また教育，特に女子教育の重要性を力説するなど彼の思想，哲学，活動を知る上に必読の書．

29. Agrawāl Vaishya　アグラワールの姓を名のる商人階級．北インド，中央州出身で，貿易銀行，金貸しに従事する氏族．

30. Nādir Shah　（1688－1747）18世紀前半のペルシアの征服王．ヨーロッパのナポレオンに対して，アジアのナーデル・シャーとして「世界征服者」の異名をもつ．アフガン族オスマン・トルコを制覇，1739年インドへの遠征を企てる．カイバル峠を越え，インダス川を渡り，デリーに侵入．当時のムガル皇帝ムハンマドは降服し，莫大な財宝と富がペルシアへ持ち去られた．

31. Muṇḍī文字　金融業者たちが用いてきた特殊文字で母音表示がなく簡略化されている．普通，ムンダー文字（Muṇḍā）と呼ぶ．

32. Ārya Samāj（アーリア協会）　1875年ダヤーナンドによって設立された宗教・社会改革団体．北インドを舞台に展開された運動は，ヒンドゥー教の偶像崇拝・多神教を排し，ヒンドゥー社会のカースト・幼児婚を批判し，浄化され純化された古代に帰るべく「真正ヴェーダへの復帰」を主張した．この協会は創始者の遺志を継ぎ，各地に学校を設立して，ヒンドゥー教徒の教育・社会事業に貢献している．

33. National Anglo Vedic School（N. A. V.）もしくはDayānand Anglo Vedic School（D. A. V.）　ダヤーナンドの没後，後継者により1886年ラーホールにD. A. V. School（1889年にカレッジに昇格し，以後D. A. V. C.と呼ばれている）が設立され，パンジャーブ，北部州，ラージャスターン等の北インドにアーリア・サマージ学校，アーリア女学校，D. A. V. スクール，D. A. V. カレッジとよばれるアーリア・サマージ系の学校が次々開校されていった．

ムラーダーバードのN. A. V. もこの協会の教育事業の一環として設立されたものである.

34. Gurukul (方式)　　1892年, アーリア・サマージは教育理念を異にする二派に分裂. 菜食主義, グルクル方式の教育立場をとるムンシーラームの一派とラーラー・ラージパトラーエ, マハートマ・ハンスラージ, パンディット・グルダット, ラーラー・ラールチャンドラの率いる改革派とである. 前者は1902年, ハリドゥワールのカーングリーにグルクルと呼ばれる独自の宗教学校を創設. このグルクル方式の主な学校にはここに述べられたリシクル・サンスクリット学校の外にグルクル・カーングリー, グルクル・ヴリンダーワン, グルクル・インドラプラスタ, ジャランダル女子大学, デーラードゥーン女子グルクル, ハートラス・アーリア女子大学等があげられる. 改革派はラーホールのD. A. V. C. に準ずる高等教育機関を各地に設立している.

35. Paṭwārī　　地税徴収のため土地や農作物に関する記録をとる役人.

36. Katthak　　インドの古典舞踊にはカッタク, マニプル, バラタ・ナトゥヤム, カタカリの4つの系統がある. カッタクは北インド(デリー周辺)の舞踊で, ムガル王朝の庇護の下に発達した. 優雅さを誇る一方, 細く, すらりと伸びた足の運びとグングルーをつけた足首から爪先の施回及びステップは目を見晴らせるものがある.

〔補　註〕

インドの現行教育制度について

インドでは教育制度審議会(1964～66)〔一般にKothari審議会と呼ばれる〕の答申に基ずき1968年に議会において学士号修得までの学年制を10・2・3・年制に定めた. すなわち, 初等教育は6歳より始まり, 5年間の小学校(Primary School), 3年間の中学校(Middle School, Junior High School), 2年間の初級高等学校(High School), 2年間の上級高等学校(Higher Secondary School)を終了後, 3年間の学士課程となるわけである. 実業学校への進学は初級高等学校修了の10年級以後で, 1～3年間の修業期間となる. 現在は旧制度から新制度への移向期にあたり, 各州においてこれに統一する努力がなされつつある. この10・2・3年制はすでにケララ, アーンドラ, カルナータカ, マハーラーシュトラ, グジャラート, 西ベンガルの各州及びデリー中央直轄地において実施に移されている. これまでの学士号修得までの修業年限は州や行政単位によりまちまちであった. すなわち従来の学士課程修了までの修業年限は次の通りである.

14年間で学士課程修了

アンダマン・ニコーバル諸島	11+3
北部州(U. P.)	10+2+2
ジャンムー・カシミール	10+1(もしくは11)+3
デリー	11+3
西ベンガル州	10+1(もしくは11)+3
パンジャーブ州	10+1(もしくは11)+3
マニープル	10+1(もしくは11)+3
中央州(M. P.)	11+3
マハーラーシュトラ州(マラートワーラー及びヴィダルバ)	10+1(もしくは11)+3
ラージャスターン州	10+1+3
ヒマーチャラ州	10+1(もしくは11)+3
ハリヤーナー州	10+1(もしくは11)+3

１５年間で学士課程修了

アーンドラ州	10+2+3	ポンディシェリー	11+1+3
オリッサ州	11+1+3	ビハール州	11+1（もしくは12）+3
ケーララ州	10+2+3	マハーラーシュトラ州（ボンベイ及び西部地域）	11+2+2
グジャラート州	11+1+3	マイソール	10+2+3
ゴア	11+2+2		
タミルナード州	11+1+3		

１６年間で学士課程修了

アルナーチャル州	12+1（もしくは13）+3	ナーガーランド	12+1+3
アッサム州	12+1（もしくは13）+3	メーガーラヤ	11+2+3

〔北部州のインターミーディエト（Intermediate）課程は１１～１２年級のことである．〕

また，初・中等課程における学年区分も一様ではない．すなわち，小学校課程は大部分の地域において５年制であるが，グジャラート州，ケーララ州，中央州（M. P.），マハーラーシュトラ，マイソール州，ナーガーランド，ゴア等においては４年制である．

中学校はほとんどの州で３年制であるが，アーンドラ州，ビハール州，オリッサ州では２年制であり，アッサム州，マハーラーシュトラ（ヴィダルバ地域），ナーガーランド，ゴア等では４年制である．

なお，インド共和国憲法（IV － 45）では，１４歳までの児童の無償義務教育が保障されている．

カリキュラムについてみれば，現行の中学課程（第８学年級）までが共通必修制となっているが，新制度下では初等高等課程（第１０学年級）まで，言語，理科，数学，社会科等の学科目が共通必修制となり，専門課程の選択はそれ以後となる

国立教育研究・訓練所（NCERT）がモデルとして提示している初等課程のカリキュラムは次の通りである．

１～２年級

学科目	時間割％
言語（第一言語，主に母語）	３０
算　数	２０
社会科及び理科	１５
図　工	１５
保健・体育	１０
作　業	１０

３～５年級

学科目	時間割％
言語（第一）	２０
言語（第二）	１０
算　数	２０
社会科	１０
理　科	１０
図　工	１０
保健・体育	１０
作　業	１０

年間授業日２４０日，１日４０分授業５時限（うち１時限は会合，ホーム。ルーム等）

第一言語は母語，第二言語は非ヒンディー語地域では，ヒンディー語．ヒンディー語地域では現代インド語のいずれか．第三言語は６年級以上において英語とする．

中央政府文部省の提示する中。高等課程のモデル。カリキュラムの構成は次の通りである．

学科目	週間授業時限数（４５分授業）
第一及び第二言語	１２
数　学	7
理科（物理学，化学，生物学）	7
社会科（歴史，公民学，地理学 経済学，商業学）	7
社会実習及び社会奉仕活動	6
保健。体育	3
課外活動	3
計	４５

社会実習の中には，養鶏。養蜂。養魚。農業。園芸、ラジオ組立。陶芸。舞踊。裁縫。タイプ印書。写真術。保育等々が含まれており，その中からいずれかを選択する．

上記の学制改革及びそれに伴なうカリキュラム変更は目下進行中であり，ビハール州に例をとるならば概略次のようになる．

１９７７年１月よりの新年度において１０年級までの学年進行は４。４（２＋２）。２となる．言語教育はいわゆる３言語方式により，ヒンディー語地域ではヒンディー語及び英語のほかに近代インド語（南インド　の言語のいずれか）が教授される．ヒンディー語地域に属するビハール州はこの方式によれば南インドの言語を教えねばならないが，教員の養成が間に合わないために第３学年から第１０学年までは当分の間，サンスクリットを必修することになる．ただし，ヒンディー語（ビハール語を含む）を母語としない生徒は第３年級からヒンディー語を第７学年からヒンディー語のほか，アラビア語，ペルシア語，サンスクリット語のうちいずれか一言語を必修しなければならない．英語は５年級以上必修．母語は第１０学年まで必修．社会科の授業は第２年級までは教科書を用いない．第３～４年級で教科書を用いた社会科が教えられ，第５年級から第１０年級までは歴史，地理，公民学が教えられる．算数。数学は第１年級から第１０年級まで必修である．理科は第１０年級まで必修であり，物理学。化学。生物学は第８年級から始まる．作業。社会実習は低学年では手工的要素を持たせ，高学年では技術習得的要素を持たせている．

新制度の第１年級から第５年級及び第７年級には新しいカリキュラムによる教育が行われ，第６年級，第８年級，第９年級及び第１０年級にはそれぞれ旧制度の第７年級，第９年級，第１０年級及び第１１年級のカリキュラムが　移されることになっている．

訳。註　　糟谷　博子